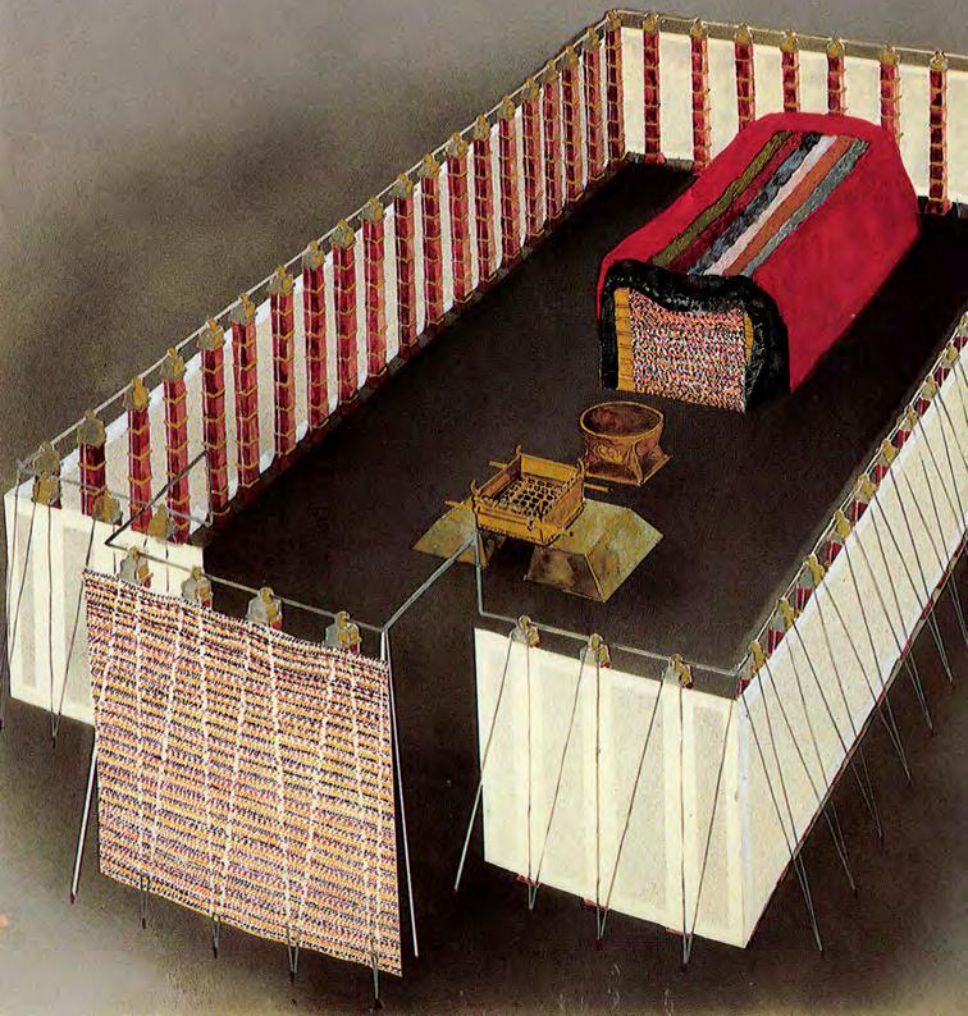


幕屋

神の会見の天幕

A・J・ボロック著



The Tabernacle's Typical Teaching

BY
A. J. POLLOCK

EVANGELICAL PUBLISHING DEPOT,
Tokyo, Japan.

目次

第一章	幕屋の建造に用いられた材料とその象徴的意味	一
第二章	幕屋の建造とその奉仕における数の意味	九
第三章	幕屋とその奉仕に関する注意事項	一六
第四章	契約の箱・贖いのふた・ケルビム	二五
第五章	供えのパンの机	三三
第六章	金の燭台	四三
第七章	幕屋の幕	五七
第八章	幕屋の板	六三
第九章	垂れ幕と幕屋の入口の幕	七〇
第十章	青銅の祭壇	八五
第十一章	幕屋の庭	一一一

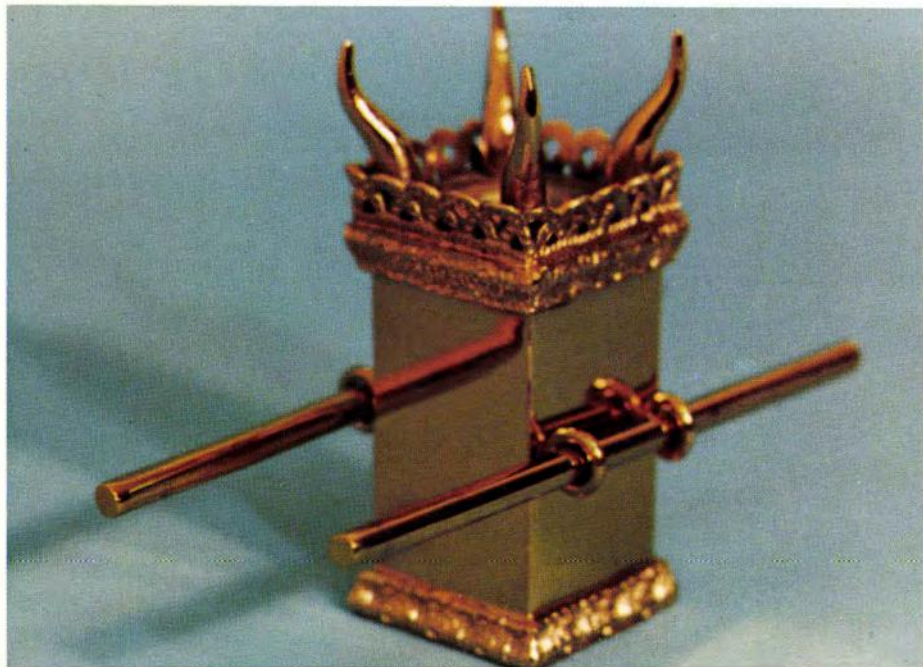
第十二章	栄光と美を表わす聖なる装束	二六
第十三章	アロンとその子らの任職	二五
第十四章	香をたく金の香壇と青銅の洗盤	二五
第十五章	供え物	二六
第十六章	全焼のいけにえ	二七
第十七章	穀物のささげ物	二七
第十八章	和解のいけにえ	二八
第十九章	罪のためのいけにえ	二七
第二十章	罪過のためのいけにえ	二九
第二十一章	贖罪の日	二九
第二十二章	らい病人のきよめ	二〇
第二十三章	赤い雌牛の灰	二九
第二十四章	キリストの死を示す四つの歴史的なひな型	三四
第二十五章	メルキゼデク	三九
第二十六章	主の七つの祭り	四八

幕屋とその調度品

至聖所の中に契約の箱（あかしの箱）がありました。こ
こには年に一度、大祭司だけが入ることができました。*



垂れ幕の手前に金の香壇がありました。



全焼のいけにえの祭壇は、幕屋の庭で最初に目に入るものです。



祭司たちはこの洗盤で手足を洗いました。



祭司たちだけが聖所に入ることができました。そこにあったパンの机です。



聖所の左手に燭台がありました。





大祭司の栄光と美を表わす聖なる装束
(出エジプト記28章)

第一章 幕屋の建造に用いられた材料とその象徴的意味

(出エジプト記二五・1〜9 参照)

神が荒野でイスラエルの民を数えられたとき、二十才以上の男子で贖いの銀を納めなければならぬ者は、六十万三千五百五十人もいた。レビ人はそのうちに数えられていなかった(民数記一・46、47)。彼らは幕屋の奉仕のために特別に取っておかれたからである。これらのことから推定すると、神が力強い御手と伸べられた腕とをもってイスラエルの民をパロの苛酷な奴隷から解放したとき、エジプトから出てきた民の数は、およそ三百万人ほどであったと思われる。

それはなんと感動的な話であろうか。神の全能の力とあふれる慈愛のなんとすばらしいしるしであろう。かつてエジプトの奴隷であったこの大群集は、過越の夜には、かもいと柱に塗られた小羊の血によって保護され、紅海を渡るときにも神の全能の御手によって救われ、そして紅海を渡って荒野に着いたとき、初めて自分たちは神によって救われたことを知った。振り返って紅海に向こう岸を見ると、かつて彼らが苛酷な労役で苦しめられた地、エジプトがあった。

いったい何の根拠があつてこの過越の出来事をキリストにあてはめることができるのだろうか、という疑問を持つ人がある。近代主義の学者はそんな根拠はないと言うだろう。しかし、神のみことばである聖書はこう告げている。「私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです」(一コリント五・7)。「これらのことが彼らに起こつたのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです」(一コリント一〇・11)。「昔書かれたものは、すべて私たちを教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです」(ローマ一五・4)。

過越はイスラエル民族の精神文化史の原点である。その過越によって神は、血による贖いだけが自身と人との交わりの唯一の土台であると語られたばかりでなく、その土台のゆえに、神はご自分の民のうちに住まわれるという御旨を告げられたのである。この目的のために、神はモーセに幕屋の建造や、いけにえをささげる順序、祭司の奉仕、レビ人の務め、またご自身との交わりに導かれた一般の人々の務めについて教えられた。もし神ご自身がモーセにこれらの律法の細かい規定について教えられたならば、それらは原始の民族の儀式的礼拝について細々と記した無味乾燥なものであつて、今日の私たちにはなんら関係がないと、どうして言うことができようか。

幕屋は二つの部分に分けられる。手前の広い部屋は、祭司が神聖な務めをする所で、聖なる所、あるいは聖所と呼ばれた。奥の小さな部屋は至聖所と呼ばれ、そこは神の栄光が贖いのふたの上にとど